

総合事務所産業建設グループ集約、4月強行へ 所管区域の事実上の変更を認めず、行政組織規則では「担当区域」に変更



市議会総務常任委員会が11日から3日間開かれ、新年度予算などについて審査しました。

このうち総務管理部関係では総合事務所の産業建設グループの集約問題、市直営ケーブルテレビ事業などをとりあげました。

市は産業建設グループの集約の「試行」を4月1日から強行する構えですが、私の質問に答える中で、市はいくつかの新しい考えを明らかにしました。

その一つは、行政組織規則の「改正」についてです。市では、13区の総合事務所産業建設グループを4月から4カ所に集約して仕事をすめるとしていますが、それに伴い、行政組織規則で使っていた「所管区域」という言葉をやめ、「担当区域」という言葉に改めることを明らかにしました。したがって、浦川原区の場合、産業建設グループと建設グループの仕事の範囲は、「浦川原区、安塚区、大島区を担当区域とする」ということになりそうです。

二つ目に、産業建設グループがなくなった地域の地域協議会には、必要に応じて集約総合事務所産業建設グループ長、または建設グループ長が参加し説明するということが再確認されました。これまで地域協議会には産業建設グループ長が常時参加していましたが、これは明らかに後退です。

災害時の初期対応では市役所職員は一部の職員を除き基本的に住所地の総合事務所に参集することになっていきますが、市はこの日の段階では、それぞれの総合事務所参集者が何人になるのかを明らかにできませんでした。4月の人事異動で動くことだからと、人数を集約しなかったのかも知れませんが、これにはびっくりでした。

ケーブルテレビ継続に市は責任を

市直営ケーブルテレビ事業は安塚区、三和区、吉川区で取り組まれ、地域放送や文字放送、行政情報の提供などが行われています。

市では2年ほど前に事業見直しを行った結果、平成26年度末をめどに、民間事業者に施設を譲渡し、運営を継続していくことを方針としています。民間事業者の募集をしたところ、応募する事業者がなかったことが明らかになりました。

私は関係住民を巻き込んだ議論をした経過を考えると、そうした人たちにいまの状況を速やかに伝えるとともに、今後も民間事業者からの応募が無いということになった場合、市が責任を持つて事業の継続をすべきだと訴えました。

地域包括支援センターもグループ化を検討へ

地域包括支援センター（以下、センターと呼ぶ）はいま、地域住民の保健医療、福祉のことを考えたら、身近になくてはならない存在となつていきます。市は、このセンターへの委託料について、実績払いを導入するとともに、見直しを行うということが8日の市議会厚生常任委

員会で明らかにされました。

この見直しの中では、センターのグループ化も検討すると思いますが、センターは現行、保健師など4人体制のⅠ型から1人体制のⅡ型まであります。このうちⅠ型は合併前上越市だけで、2人体制のⅢ型、Ⅳ型は柿崎、大潟など7区にあります。1人体制のⅤ型は安塚、浦川原、大島、牧、清里、名立となっております。グループ化でセンターのない区がでるとしたら大きな問題です。

日本共産党の平良木議員は、「総合事務所の産業建設グループの集約だけでも地域住民に大きな影響を与えている。これは市役所の機構ではないが、軽々にやってみるべきではない」と訴えました。これに対して八木高年齢者支援課長は、「実態を検証しながら、慎重に対応していきたい」と答弁していました。グループ化でセンターがなくなる区が出てこないか心配です。今後の動きを注視していきたいと思えます。

地域包括支援センターの形態と職員

形態	対象地域（箇所数）	配置職員
I型	合併前上越市（6）	4人 保健師等、社会福祉士、主任介護支援専門員
II型	柿崎、大潟、頸城、板倉区（各1）	2人 保健師等、社会福祉士又は主任介護支援専門員
III型	吉川、中郷、三和区（各1）	2人 上記3職種のうち、いずれか2人
IV型	安塚、浦川原、大島、牧、清里、名立区（各1）	1人 上記3職種のうち、いずれか1人



春よ来い 第二四四回 フキ味噌

母が退院して一〇日ほどたちました。人間なら誰しもそうだと思いますが、退院してもすぐには元の健康状態に戻らず、しばらくは大事をとることが必要になります。ところが、母の頭の中は別のことでいっぱいになっていたので。

数日前、中学校の卒業式が終わって家に戻ったところ、居間に母の姿がありません。「ばちや、おまん、どこにいるか」と声を出しても応答なしでした。そうなる、どうしても最悪の事態が頭に浮かんでしまいます。ひよっとすれば、まためまいがして、倒れているんじゃないか。そう思って、トイレ、風呂場、台所、廊下と声を出しながら探しました。しかし、どこにも見当たりませんでした。

落ち着いて振り返ってみると、玄関の戸が開いていました。私が開けた記憶がありませんので、「母は外へ出かけたに違いない。たぶん、近所でお茶飲みだな」と勝手に判断して市役所に向かいました。

市役所に着いてまもなく、家に電話を入れたら母が出ました。
「おまん、どこへ行っていったんだね」
と訊いたところ、驚きましたね。

「おらちの裏でフキノトウ採りしてたがど」
という答えが返ってきたのです。あきれてしまいました。退院してからまだ一週間も経たないというのに、もう外で動いているのですから。

「間違っても川のそばになんか行きなんなや」
「おー、行かんわや」
そんなやりとりをした後でも、母の言葉は信じられませんでした。心配させないためにやむなく「行かんわや」と言っている雰囲気を感じ取ったからです。

母の気持ちは分からないでもありません。母は上越市の山間部、大島区で生まれ育ちました。今冬も四メートルからの積雪になるほど雪深いところなんです。それだけに春になって、田んぼの畦などに出るフキノトウをどれほどうれしく思ったことか。

じつは私も、雪解けの頃になると、なぜか体がうずうずしてくるのです。私が少年時代を過ごした尾神岳のふもと、螢場では南向きの田んぼや釜平川のそばで雪解けが早く、その周辺でフキノトウを採るのが何よりも楽しみでした。

母は山菜採りが大好きで、そのスタートはフキノトウです。フキノトウから始まって、コゴミ、カタクリ、ノカンゾウ、ノノバ、タラの芽、ウド、ゼンマイ、タケノコ、ワラビと続きます。

ただ、母にとって、数年前から急傾斜の山での山菜採りは無理になってきました。昨年も群馬県の従兄たちと一緒に山に向かいましたが、若い頃のように急傾斜のところを自由に動き回ることができません。すぐに休んでしまうのです。

山が無理でも平場はまだ大丈夫です。平場だと山菜はコゴミ、ゼンマイ、ワラビが中心になります。母は愛用している三輪自転車のごに満載になるまで採り続けます。ウドも川べりにあるらしく、時たま採ってくることもあります。

さて、母が今年初めてフキノトウを採ってきた日、市役所から戻ると居間のテーブルの上には皿に入ったフキ味噌がありました。「食べてみる」と言われて手を出すと、独特の香りと苦みが口の中に広がりました。「春だなあ。うんまい」と言ったら、母はその言葉を待っていたかのようにフッフッと笑いました。

柏崎刈羽原発の廃炉を求める集いに580人

柏崎刈羽原発の廃炉を求める集いが10日、柏崎産業文化会館で行われました。会場には580人が集まって、椅子が足りなくなるほどでした。被災者からの訴え、柏崎刈羽原発で事故が起きた時に放射性物質が

上越地域各消防署における空間放射線量測定結果（測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常の範囲は1時間当たり0.016~0.16μSv（マイクロシーベルト）だということです。

	3月6日(水)	3月13日(水)
上越南消防署	0.036	0.026
上越北消防署	0.047	0.040
新井消防署	0.040	0.037
頸北消防署	0.043	0.046
頸南消防署	0.040	0.043
東頸消防署	0.040	0.043
高士分遣所	0.043	0.043
名立分遣所	0.053	0.060

どう拡散するかを予測するシステムを開発した研究所による発表、立石雅昭新大名誉教授による柏崎刈羽原発の地盤調査結果批評などがありましたが、いずれも充実した内容で、参考になりました。

このうち、立石教授は、柏崎刈羽原発敷地内の断層と活動年代について詳しく説明、敷地内にある23本の断層はすべて活断層だとのべました。原子炉建屋、タービン建屋などの直下にたくさんの断層があり、いずれも活断層だとすると、絶対、再稼働させてはならないですね。

(株)環境総合研究所の鷹取敦さんは、柏崎刈羽原発で事故が起きた時に放射性物質がどう拡散していくかについて、同研究所で開発した『原子力発電所事故時想定シミュレーションシステム』を用いて予測しました。この結果にも注

目しました。鷹取さんは、西からの風が吹いた時、北東風が吹いた時の2つのケースで画像を示されましたが、5キロ圏内、30キロ圏内、50キロ圏内と単純に割り切れない形で汚染が広がっていくことを明らかにしました。北東風が吹いた時の予測図（下の写真、風速2m/s、事故後1年経過した中で積算線量がどうなるか）は上越市がどうなるかを示していて、これでは、市全域の住民が避難しなければならないことになるなと思いました。

